研究主題　　**自発的・主体的に学校生活を送ることができる児童生徒の育成**

～支援体制を充実するための副校長・教頭の役割～

提言者：武雄市教頭会　武雄市立武雄中学校　　高取　照秋

## １　テーマ設定の理由

近年、児童生徒の多様化や社会の急速な変化に伴い、学校には「どの子も自発的・主体的に学校生活を送ることができる児童生徒の育成」のための環境づくりが求められている。GIGAスクール構想の実現と共に、ICTの活用や外部機関との連携など、支援体制の整備が急務である。

一方で、発達上の課題や家庭背景、自己肯定感の低さなどから、学校生活への適応が困難な児童生徒も増えており、その支援の中心には、副校長・教頭のマネジメント力と組織力が必要とされている。

本研究では、児童生徒が「自発的・主体的に学校生活を送ることができる」姿を目指し、そのための校内支援体制の在り方と、副校長・教頭の果たすべき役割が大切であると考え、本主題を設定した。

## ２　研究のねらい

自発的・主体的に学校生活を送ることができる児童生徒の発達に関する支援体制について、「学習支援に関すること」「生徒指導・教育相談に関すること」の２つの視点で、武雄市における課題を把握し、支援体制づくりにおける副校長・教頭の役割を探る。

## ３　研究の経過

⑴　１年次（令和５年度）
- ①　研究主題、設定の理由、ねらいの検討
- ②　アンケート調査の実施と結果の考察
- ③　実践報告(中学校１校)と各学校の実践

⑵　２年次（令和６年度）
- ①　各学校の実践の共有（１回目）
- ②　実践報告（中学校１校・小学校２校）

⑶　３年次（令和７年度）
- ①　各学校の実践の共有（２回目）
- ②　まとめ（成果と課題）

## ４　研究の概要

⑴ アンケートを基にした課題設定

アンケートでは、「上手くいった事例や具体的な取組」「支援体制における副校長・教頭の役割として大切なこと」の質問内容で分析を行い、①学習支援に関すること、②生徒指導・教育相談に関することの２つの課題を設定した。

⑵ 研究の仮説

アンケート結果を踏まえ、各小中学校の実践を基に、副校長・教頭として①学習支援に関すること、②生徒指導・教育相談に関することの２つの視点で、武雄市における課題を把握し、支援体制づくりを行うことで、自発的・主体的に学校生活を送ることができる児童生徒を育成することができるであろう。

⑶ 研究の実際

①　主に学習支援に関わる副校長・教頭としての関わり

ア　実践内容

武雄市の小中学校では、教育DXを推進しGIGAスクール構想の下で学校における基盤的なツールとなるICT機器を最大限に活用しながら、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図ることを教育の重点項目の一つとして掲げている。また、今年度も文部科学省指定のリーディングDX指定校となった４校が武雄市の小中学校の中心となって１人１台端末を使った授業改善をリードしている。

イ　副校長・教頭としての関わり

(ｱ) 組織マネジメントの推進

多様な人材がそれぞれの専門性を生かして能力を発揮できるように、「主体的に学ぶ教職員集団づくり」を研究主任や教務主任を中心に組織全体の資質向上を図る体制を整える。

(ｲ) 教育DX 推進のための整備

「学習にいつでも取り組める環境づくり」「ICT推進員との連携」「１人１台端末の使用ルールの徹底と見直し」を生かした学習環境づくりに注力する。

ウ　具体的な取組

(ｱ) 主体的に学ぶ教職員集団づくり

a　計画・連絡・調整

研究主任を中心に、年度当初に年間を見通した具体的な授業改善研修計画を立てるように指示した。研修には外部講師を積極的に活用し、内容の充実を図った。

b　見つけて、広げる

普段の教職員の授業の様子を参観し、有効なICT活用を見つけて、他教職員に広げた。また、情報化推進リーダーを中心に教職員の困り感に沿ってミニ研修会を実施した。ミニ研修会のみならず、放課後職員室で自然発生的にICTスキル研修が始まるようになり、職員個々のスキルが高まっていった。

c　学びを推奨する

書籍の紹介コーナー設置・事例集URLの共有や市内の教職員がアクセスできるクラウドへの指導案やワークシートのアップを行った。

d　小中連携

リーディングDXの指定校を中心に協力校であるその他の全小学校と中学校で１人１台端末の活用と「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図るための学習方法について情報共有した。

e　授業相互参観と合同授業研究会の設定

リーディングDX指定校４校の校内研修の年間予定をクラウド上で共有し、授業の相互参観を活発に行い、互いに学び合う風土づくりを築いた。講師を招いて合同研修会を実施するなど、教職員の学びの場を設定した。

(ｲ) 学習にいつでも取り組める環境づくり

a　１人１台端末を文房具として、学校や家庭においてシームレスな活用をするために、家庭でも毎日使用できるよう、専用のバックを購入し持ち帰りができる環境を整備した。

b　ICT推進員との連携

武雄市ではICT推進員が各学校に１名配置されており配置時数も多い。そのため副校長・教頭が中心となってICT推進員の役割をマネジメントしていくことで学校全体の教職員のICT活用の指導力が向上し、教育DXの推進にもつながった。校長・教頭が中心となりICT推進員との連携をし、１人１台端末の破損や機器の不良等の市への報告・修理の依頼を行った。

「学校行事とICT推進員の業務の調整」「授業支援の体制づくり」「教職員とICT推進員の研修会」「個人のICT活用スキルアップの補助」など各学校の実態に応じた取組が行われており、児童生徒がいつでも使いたい時に自由に学習用端末を使用できる支援体制が整った。

**【写真１】担任への端末操作支援**

c　１人１台端末の使用ルールの徹底と見直し

情報化推進リーダーや研究主任を中心に使用ルールを作成し、教職員で検討調整して児童に周知した。対応すべき課題は、児童のスキルアップに伴って、次々に出てくるので、教職員は対応すべきことを把握した際は、情報化推進リーダーに報告した。情報化推進リーダーと学習部等で対応を検討して週１回の連絡会で諮り、児童に周知した。取り組みが進むにつれて、児童のモラルの高まりを実感した。

②　主に生徒指導・教育相談に関わる副校長・教頭の役割について

ア　実践内容

ケース会議における支援体制の構築、情報共有、外部機関との連携、若手教職員の育成や教職員が相談しやすい環境づくりなど組織的な支援体制を目指し、課題解決に向けた取組を推進した。

イ　副校長・教頭としての関わり

(ｱ) 教職員の成長を促す支援体制の構築

教職員が自身の専門性を生かし、児童生徒のためにより良い実践を行えるよう、積極的に支援する。また、若手教職員の成長と行動変容を促すための支援体制や教職員の困り感を共有し支え合う支援体制づくりをめざす。

(ｲ) 組織全体の活性化とアイデアの共有

ケース会議において、教職員一人一人の優れたアイデアを尊重し、それらを学校全体に共有することで、教職員が互いに協力し、組織全体が目標達成に向けて取り組むよう促す。

(ｳ) 外部機関との円滑な連携

児童の困り感を把握している教職員と外部機関との連携を円滑にし、迅速に問題解決できるよう促す。

ウ　具体的な取組

(ｱ) 教職員の困り感の共有と若手教職員の育成

保護者対応や学級経営など多くの課題が副校長・教頭に集中する中、早急に対応すべき優先順位を意識しながら、情報の整理に努めた。特に重視してきたのは、「教職員が何でも話せる存在」として話を傾聴し、真摯に受け止める姿勢をもつことである。そのために、「悩みを安心して話せる職員室の雰囲気」や「支え合える教職員集団」を目指し、日頃から教職員の困り感に耳を傾ける時間を意識的に確保した。

また、チームビルディングをめざし、校内でその「自立した人」を育て、それぞれの強みを今の学校で発揮してもらうために若手育成に力を入れる。適宜ミニ研修を行い、生徒指導のスキルや学級の集団づくり、授業づくりの向上を目指した。

(ｲ) ケース会議の活用

困っている児童生徒（または保護者）の問題を解決するために、担当教諭の積極的な呼びかけにより適宜実施した。校内の関係教職員やSSW、武雄市こども家庭課職員、当該児童生徒の保護者等に参加を呼び掛けた。担当教諭へは主体的に動いてケース会議を開いたことを価値づけしてフィードバックし、意欲づけた。

また、ケース会議の持ち方が非常に建設的であったため、校内でそのやり方を周知させた。また、ケース会議の設定と時間確保などを支援した。

(ｳ) 外部機関との連携

児童の実態や家庭での様子を保護者と相談しながら把握し、SC・SSW・県の専門相談機関・教育支援センター・武雄市こども家庭課子育て相談係・医療機関等と連絡を取り合いながら児童・保護者の支援を行った。

a　笑顔コーディネーターとの連携

経済的な問題で登校や就学、進学できないという問題を解決する目的で、武雄市こどもの貧困対策課で配置された「こどもの笑顔コーディネーター」とSSWと副校長・教頭、特別支援教育コーディネーター等で定期的に会議を行っている。対象児童生徒宅への訪問や就学支援・奨学金制度の紹介や申し込みの支援を依頼したり、対象家庭に笑顔コーディネーターを通じて「一般社団法人おもやい」から食品や日用品等の支援をお願いしたりした。

【図１】こどもの笑顔コーディネーター

【写真２】「おもやい」からの支援物資

b　武雄市教育支援センター「スクラム」との連携

学校に足が向かない児童生徒に対し、学びを止めないための機関と連携した。毎日の出欠状況の共有や学校行事や時間割の共有等をしながら、担任とも繋がりつつ、引きこもらないよう声掛けや手立てを講じた。

c　武雄市こども家庭課との連携

児童生徒や保護者への支援が必要な場合に、具体的な支援方法を提示して継続的な支援をする武雄市こども家庭課と連携した。

d　職員との連携

欠席連絡や教室に入れない児童、生徒指導などの情報は副校長・教頭に集約され、校長や担当者と共有しながら、児童ごとの状況に応じて柔軟に対応している。校長の指導やケース会議をもとに、実現可能な目標を立て、状況に応じて見直しながら支援を行っている。

支援の基本は「できることから始める」であり、児童や保護者の思いを尊重して無理のない登校時間を設定し、学校とのつながりを保てるよう配慮している。教室に入れない児童には、保健室などで学習内容を確認し、教室への誘導やリモート接続による学習支援を行う。安心して学べるよう学習スペースの整備も進めている。

担任が対応できない場合は、教育相談担当（養護教諭）や副校長・教頭が中心となって支援を実施した。今年度からは学校生活支援員が不登校支援にも関わるようになり、体制の充実が図られている。また、武雄市職員の声かけや励ましも児童の安心感につながっている。

「担任・教育相談担当・特別支援教育コーディネーター・養護教諭・生徒指導担当」など、役割分担を明確にし、組織的なチームによる支援の重要性を実感している。

## 5　研究の成果と今後の課題

(1) 成果

①　学習支援について

教頭として、組織マネジメントの推進と教育DXの環境整備を主導し、全教職員と連携しながら１人１台端末の効果的な活用を図った。

その結果、児童が自らの学習に対して自己調整を加えながら主体的に取り組む姿が多く見られるようになり、自発的・主体的に学びに向かう姿が見られた。

②　生徒指導・教育相談について

若手の教職員の育成や教職員の困り感の共有等の支援体制の構築を行ったことで、教職員の専門性の向上 、組織的な支援体制の構築 、児童生徒の安心・安全な学校生活の実現などが図られている。

ケース会議を適宜行い、外部機関と連携することで、児童生徒が以前より自発的・主体的に学校生活を送ることができるようになった。

また、外部機関との連携を進めていく中で、こどもの笑顔コーディネーターの方や武雄市こども家庭課の方からも学校へ情報提供が多くあり、学校で該当児童を支援していく上で大いに参考となった。

(2) 課題

①　学習支援について

リーディングDX指定校が中心となって、小学校から中学校へつなぐための１人１台端末の系統を吟味し、カリキュラムを作成して小学校卒業時のICTスキルをどの学校も揃えていく必要がある。

年度当初から年間を通して、計画的に取り組むことができるような研修体制を構築する。

②　生徒指導・教育相談について

ケース会議や外部機関との連携により少しずつ上向きになってきた児童生徒に対し、関わった職員が異動しても継続的な支援ができるよう組織的マネジメント力を高める必要がある。